

## 【巻頭言】

### 「AIと一緒にカルテを開くという日常」

小林 和 克\*

生成 AI という言葉が、まるで当たり前のように飛び交うようになったのは、ここ一年ほどのことでした。正直、最初はどこか遠い話のように思っていました。ニュースで取り上げられているのを眺めながらも、自分たちの医療の現場に、本当にそんな技術が役に立つ日が来るのかと半信半疑で、慌ただしい救急・手術・外来の合間に、AIなんて触っている余裕なんてない——そんな風にも思い込んでいたのです。ところがこの夏、ついに私たちの病院にも正式に生成 AI「Ubie」が導入されました。それも、医師や看護師だけでなく、事務やリハスタッフまで、職員なら誰でも触れられるようにという方針で、大きなニュースのはずなのに、病院内の空気は不思議と柔らかく、「まずは使ってみようか」という前向きさが漂っていました。背景には病院長の「役に立つかどうかは、使い方次第」というシンプルな言葉があったのだと思います。その声がどこか現実感を帯びて響き、肩の力を抜いて始められたのが良かったのかもしれない。

初めて AI に触れた日のことを、今でもよく覚えています。長年術後フォローしている患者さんのカルテを要約させてみたのです。画面に現れたまとめは想像以上に整理されていて、他科での検査や診療内容まで一目で俯瞰できる形に整えられていました。正直、思わず声が出るほど感心しました。でも同時に、入力していないはずの年齢や性別を勝手に埋めていたのにはぎょっとしました。もっともらしく間違える AI というのは、想像していた以上に厄介です。あの時の、便利さと不気味さが入り混じった感覚は、今も少し心に残っています。

脊椎外科の診療は、とにかく情報量が多い仕事です。腰痛の影に潜む感染や腫瘍を見抜くためには、画像や血液データだけでなく、生活習慣や既往歴、数年前のちょっとしたメモのようなカルテ記録まで手繰り寄せる必要があります。そうした散らばった断片を AI が整理してくれるだけで、頭の中の負荷がふっと軽くなる。今までは患者さんの話を聞きながら頭の中で情報を並べ替えるのに必死でしたが、AI が事前に下準備をしてくれると、診察中の心の余裕が少し取り戻せるような気がします。患者さんへの説明も少し変わってきました。腰部脊柱管狭窄症や頸髄症の治療選択について話すとき、AI に簡単な図や文章の素案を作らせることもできます。それをもとに自分の言葉で手を加えていくと、今までよりも患者さんの理解につながります。AI の力は派手ではありませんが、説明の場面において、確かに支えになっていると実感します。AI の導入は、単なる効率化だけではなく、病院全体の空気まで変えました。会議の議事録や抄読会の要約を AI が仕上げてくれることで、スタッフは患者さんに向き合う時間を少しでも増やせる。紹介状の下書きもあつという間で、以前は後回しにしていた書類仕事も、今ではサクサク片付くようになりました。こうして浮いた時間やエネルギーは、患者さんのケアやカンファレンスに向けられています。

とはいえ、AI は決して万能ではありません。嘘をもっともらしく言うこともあるし、こちらの曖昧な質問には曖昧な答えしか返さない。その不完全さを前提に使うという姿勢が大事なのだと思います。そして、この「問い方」を工夫するという作業が、まるで私たちの診断力を試すかのようです。AI にどう質問するかを考えることは、自分の頭の中を整理する作業でもあるのです。

\* 日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院 整形外科・脊椎脊髄外科部長兼整形外科・リハビリテーション科部長

今思うと、AI を取り入れたからといって仕事が劇的に変わったわけではありません。でも、「どこか少し余裕ができた」と感じる瞬間が増えたのは確かです。情報に追われるばかりだった日々の中に、ほんの少しの遊びや好奇心を取り戻したような感覚です。AI は私たちの代わりに判断する存在ではありません。ただ、そばに置いて一緒に考えることで、見える景色がほんの少し広がる。それだけでも、この変化を受け入れる価値はあるのだろうと思います。これからもきっと AI は進化し、医療の現場もどんどん形を変えていくでしょう。でも、変化を怖がらず、面白い余裕を持ちながら、一步一步歩いていけたらと思います。今日もまた、AI と一緒にカルテを開きながら、そんなことをぼんやり考えています。